

桂 紹隆 著

『インド人の論理学』を読んで

林 隆

同時通訳機のようなものが既にできていると言う。その機械に向かつて日本語で話せばそのまま翻訳されて、例えば、英語の文章となつて聞こえてくるのである。かつてヨーロッパの人々はラテン語を使うことによつて知的世界に介入してくる政治的野心からより解放され、より広い知的市場で知的産物の売買ができた。私たちがかつて中国語を勉強したのも自ずとその方向にあつたようだ。李氏朝鮮時代の儒者丁茶山が伊藤仁斎とか荻生徂徠を読んで、日本にもこんな優秀な儒学者がいる、こういう人々がいる限り日本でも武士の暴走を食い止めてくれるであろう、と書いているとか。

しかし、こんなことがあつた。桂先生がまだ京都産業大学いられたころ、夏休み、先生の研究室が私の研究室の下にあつて、ふらりとそこを訪ねたとき、先生は長尾雅人先生の英語論文を日本語に翻訳していられた。ある箇所でも分らないと苦闘していられた。僕も覗き込んで、おか目八目、逐語的に訳してみたらと言つた。あぶり絵のように長尾先生の文意

が浮かび上がつてきた。こんな話もある。パリのキャップフェで現在の大阪市立大学教授小林道雄氏と話していた。博士論文の試問を受けられる直前であつた。彼の四〇〇頁に及ぶ仏語論文について、ネイティヴに見て貰つたところ、文法的にはどこも間違つてはいなかつたが、内容的に大分直された、と言つていられた。またこんなこともあつた。丸山眞男を読んでいた。この人は英語は苦手だろうなと思つた。この感想をある人に洩らしたら、そうなんだ、アメリカで彼が講義したときかなり難渋したそうだよ、ただ、奥さんがとても英語のよくできる方だそうだと話してくれた。この人々はそれぞれの分野で第一級の人々である。彼らとその思索においてアテナの知に与からんか、深く日本語の呼吸が帰つて来る。そのままでは通じないのだ。

日本語も明治以来急速に欧文脈化してきたと言われる。桂先生は若くしてその感度の良い素直な知性をカナダの地で長く英語を媒介として世界の知性に、ある普遍に、さらしてこられた。この本にはそうしたことからくるまづ底堅さがある。彼は「インド人の論理学」をこの本で「仲間言葉」から解放して語つてくれている。読書が一つの対話であるとすれば、「インド人」の長い論理の思索とやつと私たちが語り合うことができるようになった。

北川秀則先生の「形式論理学の術語を用いてインドの論理学を説明することは、インドの論理学をそのありのままの相において再現することではなく、インドの論理学の研究を装いながら実は形式論理学の応用問題を弄ぶことにほかならない」(『講

座仏教思想」第二巻、一九七四、理想社）という戒めを肝に銘じつつ、ともかく、『インド人の論理学』を読んでみよう。

直ちに第五章第二四八頁。『順中論』の論理式的具体例の所。提案「語は非恒久的である」。先生は第三章に「インドにおける討論の伝統」を置いていられる。「提案」なるものが最初にボンと来る。それは討論と言うよりも争論であった所のインドの論理の出生の事情を考えさせる。『ポール・ロワイヤルの論理学』が、中世の論理学に比べて数段に劣るものであった、と言われるが、この論理学を生み出したものは「実在に関する知識の発見法」の要請であった。「数学基礎論」の要請から生まれたものではなかったのである。私たちはここでプラグマチズムの要請から生まれた論理学を思い出すこともできる。この劇的緊張を彷彿させる「提案」から、この「提案」がその人々に向かって発せられる所のその人々を消し去ってみよう。「提案」は「語は非恒久的である。不可思議だ。」というC・S・パースの「懐疑」に変容するであろう。「提案」をフレーゲの「言語理論」に従って、「語」を ρ とおき、「非恒久的である」を S とおいて、 $S\rho$ と記号化しよう。インドの人々は形式の取り出しはしたけれども、ヨーロッパ中世の論理学者たちに同じく、記号化に進むことはなかったのである。

理由「作られたものであるから。(中略)」。パースで読むとabductionである。「つくられたものである」を Π とおこう。「理由」は $H\rho$ と記号化される。

喩例「もしものが作られたものであるなら、すべて非恒久的である。例えば壺などの如し」。

この喩例とは一体何であったのか。

先生は「チャラカ・サンヒター」では単に「例えば、虚空のように」「例えば、壺のように」と実例が挙げられるだけであった(G 248)と言っていられる。それが果たした機能は随分と違うけれども、折口信夫の「諺」考が思い合わされる。彼はその「上代日本の文学」論の中で、たとえば、「ところで、祝詞を伝へ伝へし、物語を語り語りして、其長い詞を伝へて居る間に、其中でも特に精髓となつて居る部分、一番神秘に属する部分があるものと考へられてきた。当初は、祝詞全部が神の詞として扱われて居たのが、其大部分が歴史化し物語化して、特に中の或部分が、眞の神の詞であると信じられて来た。其一部分の極短い、而も重要な詞が祝詞の中では諺となり、物語の中では歌となって独立して来る。」(中央公論社折口信夫全集第一二巻、三四六頁)とある。「実例が挙げらるだけ」となった喩例はその運命において、この「諺」と軌を一にしたものではないであろうか。そして機能的には、アリストテレスの「通念」、ペトルス・ヒスパニアスのLocusの役割を果たしたと思われるのである。

先生は続けて、上の『チャラカ・サンヒター』に対して「一方、と書かれる。「ヴァーツヤヤナでは「発生するものである皿などの実体は非恒久的である」と言うように「論証されるべき性質」(S)と「理由」(H)が共存する実例と「発生しな

いものであるアートマンなどの実体は恒久的であると経験上認められる」というように、SもHも見いだされない実例をそれぞれ一つ挙げるだけである」(ibid.)。

これが、「ところが、『順中論』では喩例は、「もしものが作られたものであるなら、すべて非恒久的である」という命題の形で提示されている」(ibid.)となるのである。つまり、全称命題の形になるのである。先生は、「喩例の表現形式は、『チャラカ・サンヒター』の方が、ヴァーツヤーヤナに比べて簡潔であり、古代インドの討論のより古い形を伝えている」(p. 235)と書いていられる。この「喩例の表現形式」の変遷は、言うならば、「諺」が古代の文脈から次第に遊離してくるにつれてその意味内容を明示的に示さなければならなくなってくる時代の要請に類比する事柄ではないであろうか。

ともかく、上の『順中論』の喩例を記号で取り出せば、

(x)(Hx→Sx)

適用「語もまたそのようである」。結論「作られたものであるから、語は非恒久的である」。ここは典型的な演繹推理になっている。例えば、レモンの教科書流に書き出せば、

- | | | | |
|------|----------------|-----|------|
| 1 | (1) Hp | A | (理由) |
| 2 | (2) (x)(Hx→Sx) | A | (喩例) |
| 1 | (3) Hp→Sp | UE | (適用) |
| 1, 2 | (4) Sp | MPP | (結論) |

パースは(以下の引用は中央公論社『世界の名著』48から。訳は山下正男先生)、「このようにして推論は、演繹(deduction)・帰納(induction)・推定(abduction)の三つにわかれる」(p. 138)と言ひ、「すべての正しい推論は演繹的か帰納的か推定的であり、さもなければそれら三つのうちの二つあるいはすべての結合したものである」(p. 135)と言っている。

abduction について見ておこう。それは「推定」とも「仮説設定」とも訳される。まずパースは「どんな演繹的推論もつぎのような公式にはめ込むことが出来る。「もしAならばB。しかるにA。ゆえにB」。(p. 138)として、「演繹的な三段論法とは、その推論の正しさが、推論された事柄と前提で措定された事柄との関係だけに依存するような推論である」。(p. 132)という。ここで「AならばB」は大前提、「しかるにA」は小前提、「ゆえにB」は結論である。そこで、「アリストテレスが帰納とは小前提と結論から大前提を導き出す推論であると定義した」(p. 138)と言ひ、「推定は小前提を他の二つの命題から導き出す推論であると見なすことが出来る」(ibid.)と言う。「他の二つの命題」、すなわち、大前提と結論である。

ところで、近藤・好並『論理学入門』(岩波全書)は、その第三部「蓋然的推理と探求過程」第二章「仮説——その発想と検証」第三節「仮説の発想」において、「パースは仮説発想を abduction と呼び、これを二つの型に分ける。これも勿論、蓋然的推理である。(1)「Bは不可思議だ。だがAならばBなりで

あれば不可思議はない。ゆえにAであろう。」勿論、Bが不可思議に思われるのも、或る背景的知识のもとであり、またAに着想するのもこの背景を控えてのことである」(p.20)と言っている。インドにおけるこの「背景的知识」に関しては、桂先生は、第二章で紹介されている。

ともかく、この「仮説の発想」は五支論証と呼吸を一つにするものではあるまいか。ここでは、上の「推定」の定義に見られたように、喩例に対応するところの大前提は予め了解済みのことであった。推理はこの「予め了解済み」と「提案」とを導きの糸として行なわれたのであったのである。

ところが、この「予め了解」が崩れ始めるときに、つまり、「或る背景的知识」が崩れ始めるときに、インド人の論理学は新しい展開を示し始めた。推理の形そのものが変化して、新しい形を生み出してきた。これが「因の三相」説の出現ではあるまいか。しかしこれはあくまで門外漢の憶測にすぎない。

第五章は、「因の三相」説を遠望しつつ、文法学者パニーニの随伴と排除の手法の紹介から始まっている。改めて「因の三相」説をみよう。「因」は「理由」と訳された。

「理由(因)は、

- (1) 論証の主題の属性であり(主題への所属性)、
 - (2) 同例群に存在し(同類への随伴)、
 - (3) 異例群には存在しないこと(異類からの排除)。
- 先の略号を用いて表現すると次のようになる。

(1) 主題への所属性・理由 \square は主題 \square に存在すること。

(2) 同類への随伴・論証されるべき性質 \square をもつものには、理由 \square が存在すること。

(3) 異類からの排除・性質 \square をもたないものには、理由 \square は存在しないこと。(p.24)とある。まず、「同例群」、「異例群」の定義からみておこう。「インド論理学における推理・論証は、(1) 既知のもの集合からなる領域において、随伴と排除によって、ある一般法則を経験的に確立し、(2) それを未知の領域のある項目(論証の主題 \square) に適用して、(3) 結論を導き出すという基本的な構造をもっている。既知の領域において確立された法則を未知の領域に適用するという点で、まさに「帰納的」である。このような帰納推理を成立させる領域という意味で、既知のもの集合を、(中略)、「帰納領域」と呼ぶことにする。」として、「帰納領域は、論証されるべき性質 \square の、例えば「非恒久性」をもつもの集合(+)と、その補集合(-)に二分される。前者が「同例群」、後者が「異例群」と呼ばれる。」(p.252)。つまり、例えば喩例に現れる「壺」と同じく既知のものであつてかつ「壺」と同じく「非恒久性」をもつもの集合が「同例群」、そして例えば「虚空」と同じく既知のものであつてかつ「虚空」と同じく「非恒久性」を持たないもの集合が「異例群」と定義されている。これを命題関数を使って表現すれば、同例群、異例群はそれぞれ、

$$\square \mid \square \mid \square \mid \square \mid \square \mid \square$$

となるであろう。

そして結果的には、性質Hに關しても「壺」と「虚空」を軸に「同例群」(H)と「異例群」(¬H)とが考えられて、「帰納領域」にSとHとを二項とするヴェン図が描かれる。

「因の第二相の「理由の同例群への随伴」とは、 $\neg S \cdot \neg H$ (＝非恒久的で、作られたもの)に「壺」などの実例があり、空集合ではないということである。因の第三相の「異例群からの排除」とは、 $\neg S \cdot H$ (＝恒久的で、作られたものではない)の領域には「虚空」という実例があり、やはり空集合ではないということである。」(p. 253)とされる。「随伴」と「排除」とは、やはり命題関数を使って表現すれば、

$$\{x \mid Sx \& Hx\} \neq \emptyset / \{x \mid \neg Sx \& \neg Hx\} \neq \emptyset$$

ということである。これを論理式で表現すれば、

$$(\exists x)(Sx \& Hx) / (\exists x)(\neg Sx \& \neg Hx) \quad (1)$$

ところで、他方、「第二相と第三相は、理由である「所作性」が論証の主題である「語」と同様に非恒久的なもの、例えば壺などの「同例群」に存在すること、それとは反対の恒久的なもの、例えば虚空などの「異例群」には存在していないことである。」(p. 250)と言われる。第二相と第三相の両解釈を記号化してみると、

$$(\exists x)(Sx \& Hx) / \neg (\exists x)(\neg Sx \& \neg Hx) \quad (2)$$

となる。(1)と(2)とは明らかに異なる。「実はこの両相は、単に

正しい理由のもつべき特徴、満足させるべき条件と言うだけでなく、(中略)、理由(H)と論証されるべき性質(S)との間に何らかの関係を発見するための「帰納法の原理」として機能している。その関係とは、(中略)、喩例に提示される、「もしものが作られたものであるなら、すべて非恒久的である」という一般的な法則である。」(p. 250)と言われる。この「一般的な法則」は、(2)の後半からは直ちに出てくる。そして引き続き紹介されるデイグナーガの九句因説、ウッデイヨータカラの十六句因説において「正因」とされるものも、第十五句因を除いて、すべて(2)の条件を満たすもののみである。先生はSとHの二項からなるヴェン図をかかれて、いわば、ジェヴォンズ・ピアノのすべてのキーを一つづつ弾いてみて、そこから「正因」を識別するというデイグナーガ、ウッデイヨータカラの作業を跡づけてくれる。

しかし、条件(1)と(2)における後半部、第三相のこの相違はどう考えればよいのだろうか。第一五句因の関わる論証式一五についてみてみよう。p. 275のウッデイヨータカラの論証式の推論を先にみよう。「この生命ある肉體」をp、「アートルマンをもつ」をS、「氣息などを保有する」をHとおいて、喩例に關してはヴィヨーマシヴァの修正をとると、

1	(1) Hp	A	(理由)
2	(2) (x)(¬Sx → ¬Hx)	A	(論証)
2	(3) ¬Sp → Hp	2	VE

1 (4) — Hp
 1 DN (適用)
 1, 2 (5) — Sp
 3, 4 MTT (結論)

ここまでの推理に関しては、「喩例」を認める限り、誰もが認めるのでなければならない。ただ $\neg Sp$ から二重否定を使つて Sp を導き出すとするのは一般には認められないであらう。つぎに、第三相についてみよう。先生は、「論証式一五は、アートの存在を認めない仏教徒のように「有我なるもの」という同例群が存在しえない人々に対して想定されたものである。この理由は因の第二相を満足させないが、第一・第三相を満足させるから「純粹否定因」という正しい理由である、とウツデイヨータカラは主張する」と書いていられる。「喩例に提示される…一般的な法則」 $(x)(\neg Sx \rightarrow Hx)$ を先生が描いてくださった図をにらみつつ変形してみると、 $(\exists x)(Sx \wedge Hx)$ となる。これは第三相上の解釈(2)にあたる。北川先生のお叱りを受けることをやっているのだが、どうも第三相の解釈(1)と(2)の間の機微が分からない。

機微と言へば、上で私は性質 \Box の同例群という言葉を使った。これは桂先生のお使いにならない言葉である。ためらいつつ、しかし先生のヴェン図を見ながら使ってみた。これは私の危険な読み込みである。どこが危険かと言へば、論証の主題である \Box は、勿論のことながら、まだ帰納領域には入っていないからである。入っているとすれば、論証式一五において第一相を満足させているとはいえないはずなのである。ここはま

だ「帰納」の国なのである。この国では集合 $\neg \Box$ は空なのである。ただ、「虚空」を喩例にもつ集合 $\neg S \cdot \neg \Box$ の補集合の元として、この補集合の相体否定 ($\neg \neg \Box$) の一部として、カントの無限判断として、「帰納領域」から無限にと拡大しようとするときに、直観主義論理学者の神経を逆なでしながら、何らかの元の存在——論証式一五においては p である——の可能性を主張する性質を持ったものなのである。

このことと関連して、デイグナーガの、ヨーロッパ中世の論証に現れる ego プリオドを思い出させる、三支の論証式 ($\neg \neg \Box$) を見ておこう。

提案「主題 \Box は性質 S をもつ」

理由「性質 \Box をもつから」

喩例「およそ性質 \Box をもつものは、すべて性質 S をもつ。

例えば、 \Box のように」

「およそ性質 S をもたないものは、すべて性質 \Box をもたない。例えば、 $\neg \Box$ のように」

異喩例に関して議論がある。先生は「デイグナーガは因の第二相と第三相に対して、別の定式化をも提示する。(2)同類 ($\neg S$ をもつもの) に見、 \Box が存在すること。(3)異類 ($\neg S$ をもたないもの) には、 \Box は決して存在しないこと。」(p. 256) と書かれ、「デイグナーガの因の三相の解釈を適用すると「非恒久的なもの(\neg 同類) に見、所作性は存在する」「恒久的なもの

(異なる類)には、決して所作性は存在しない」というように、「所作性」と「非恒久性」との間に、「およそ作られたものは、非恒久的である」「およそ恒久的なものは、作られたものではない」という一般法則、すなわち「包摂関係」が明示されているのである。(pp. 257-258)と書いていられる。この一般法則を記号化してみよう。

$$(x)(Hx \rightarrow Sx)$$

$$(x)(\neg Sx \rightarrow \neg Hx)$$

これについて、Hの存在領域がSの存在領域によって包摂され、Sの非存在領域がHの非存在領域によって包摂されると理解される (p. 257)。そしてこの理解がそれぞれ図示され、

「両図は表裏の関係にあるから、デイクナーガの解釈に従えば、因の第二相と第三相とは論理的には全く等価であることになる。」(ibid.)と結論される。この結論は北川先生に見られる。北川先生は「このことはデイクナーガが所謂 *contraposition* の法則を知っていたことを意味し、インド論理学史上重要な一齣を形成する」と言っている。

しかし他方、両先生の言っていることは直ちに認められるのであろうか。 *contraposition* と言っても、 $P \rightarrow Q$ が成り立つならば、確かに $\neg Q \rightarrow \neg P$ は一般的に成り立つ。しかし、 $\neg Q \rightarrow P$ が成り立つからと言って、 $P \rightarrow Q$ が成り立つとは直感主義論理学者は認めはしまい。それを認めると否定の否定は元の肯定、 $\neg \neg P$ は P を認める結果になってしまうからであ

る。これは論証式一五においてデイクナーガが $\neg S_P$ を認めても、だからといって S_P は認めなかったことに連なるであろう。こう言いつつ急いでつけ加えておかなければならないことは彼が現代の所謂「直感主義論理」を主張したと言っているのは勿論ない。「古典論理」よりも「直感主義論理」の方がより緩やかで、人間の思考の自然により近いという事実を指摘しているのである。先生は第四章で「一種の「多値論理学」としてナーガールジュナの議論を解釈する可能性が示唆される」(p. 165)と書いていられる。この目配りは先生の柔らかい魂の印である。

デイクナーガの考察の終わりにあたって、「以上の考察から帰結することは、デイクナーガにとつて、遍充関係は、決して理由とその対象である「論証されるべき性質」との間の「必然的關係」を意味しているとは言えないということである。ことばの場合にせよ、推理の場合にせよ、二項間の遍充関係は随伴と排除の原理によって想定される一般法則ではあるが、それは異類もしくは異例群において反例が見いだされない限り妥当すると言う一種の「仮説」である。」(p. 286)と書いていられる。この文章は、デイクナーガのアポーハ論に関連して語られる。「中世ヨーロッパ哲学の術語を借りれば、デイクナーガは、ニヤーヤ学派やヴァイシェシカ学派の実在論に対して「唯名論」の立場をとったということもできよう。」(p. 285)という文章と呼応して、デイクナーガの立場を鮮明にするものである。

それにしても、喩例をどのように理解するかということは分りにくい。上のデイグナーガの三支の論証式の異喩例における「例えば、△のように」ということの必要性は「違和」を感じさせる突出したことばである。先生の言及していられるS・ツールミンから見ると、「一般法則」が成立するいわばフィールド、それを喩例は同定する役割を果しているとも考えられはするのだが。一般的に、インド人はあくまで具体的に沿って思考をすすめるのだ、と言うのであれば、それは何故なのか。この本の底を流れる一つのテーマ…「インド人の思考方法Ⅱ帰納法」はそれに対する一つの解答なのであろう。ともかく、北川先生の戒めを思い出しつつ、桂先生のこの本を杖として、考え考えしてみたい。桂先生は、インドの人々が長期間にわたってそのために知の営為を行ってきたその当のもの大枠は「解脱」であった、と言っている。往相 (soṭṭh) と いえ還相 (paṭṭh) といえ接頭辞の基点は生の具体なのである。目つきは実験する化学者のそのようだ。先生は、最後に「十二縁起」をおいていられる。これも、また、「探求」がなされるとき「背景的知识」なのである。

書評と言うよりは親しい桂先生との対話になった。学生時代が懐かしい。長尾先生を取りまいたあの人々を思い出す。あの若いエネルギーが、ハスが花開くときボンと音がするとうい、あちらこちらでボンボンと音を立てているようだ。